

研究課題	ことばの教室の教育 DX：対面での構音指導を充実させるオンライン支援のあり方 その2
副題	～動画による家庭学習支援とオンライン上の外部専門家を活用した担当者支援～
キーワード	ことばの教室, 構音障害, 保護者との協力, 外部人材との協働
学校/団体名	中越言語・難聴教育研究協議会（事務局：三条市立裏館小学校）
所在地	〒955-0081 新潟県三条市東裏館3丁目2番67号
ホームページ	

1. 研究の背景

筆者は2016年度に「ことばの教室」で発音を指導（以下、構音指導）する際に児童の口腔周辺をデジタルテレビに拡大提示する取組を行った。これをきっかけとして中越言語・難聴教育研究協議会（以下、中越言難）の有志と共に、構音指導での ICT 機器の効果的な活用について探り始めた。その後、新潟県では2018年度より「ことばの教室」の担当希望者に対し現任者による OJT 方式の研修制度が開始され、筆者は2021年度より新潟県立教育センターの「ことばの教室」新規担当者向けの研修を担当している。その中で、OJT 方式の研修を未受講のまま着任せざるを得なかったり、着任後に相談先が無かったりする担当者が毎年若干名いることに気付いた。さらに ICT 機器の構音指導への活用に関心が低いといった傾向も感じた。そこで2024年度、Panasonic 教育財団より教育助成を受け GIGA スクール構想で劇的な進化を遂げた環境で、「ことばの教室」に来て指導を受ける頻度が少ない児童・保護者に対して動画を用いた家庭学習支援、「ことばの教室」での指導経験が少ない担当者に対してオンライン会議システムと外部専門家（言語聴覚士、以下「ST」）を活用した授業支援に取り組んだ。実践からは、「児童が言えるようになった音を単語の中で使う練習では、動画での家庭学習による上達を認めた。」等の知見を得ることができた。また、授業支援を受けた担当者を対象にした質問紙検査からは、構音指導における複数の項目で不安が軽減したことが分かった。

2025年度は、これらのオンライン支援の更なる普及や発展を目指して、次の4つの視点（支援対象の拡大、担当者の ICT スキルに応じた機器やアプリの選択、動画を用いた家庭学習支援が有効な指導場面、担当者支援における適切な ST の介入頻度）から実践に取り組み、成果を検証していく。

2. 研究の目的

(1) 教育用グループウェアと動画を用いた家庭学習支援（以下、実践1とする）

構音指導では、「ことばの教室」担当者が音声や口形のモデルを示して児童に模倣させる必要がある。家庭学習では保護者が指導者役を担うことになるため、通常は授業に同席している保護者に対し指導者がモデルの出し方を教えたり、保護者に練習してもらったりする。しかし、保護者が授業同席できない場合、正しいモデルを理解することが難しい。文字情報のみでの伝達も困難である。そこで、課題を伝える際に動画を用いることで、保護者が担当者の意図を理解して正

しいモデルを示せるようになり、有効な家庭学習を実現できると考える。

また、特別支援学級在籍児童は構音に課題があっても、制度上「ことばの教室」に通うことができない。支援学級担任が児童に対して構音指導を行うことがあるが、必ずしも担任が言語障害に詳しいとは限らない。このような事例に対しても、「ことばの教室」担当者が支援学級担任と動画をやり取りすることで、児童の構音練習を支援することが可能だと思われる。そこで、実践1は、以下の視点から取り組み、成果を検証していく。

- ・支援対象の拡大：保護者の授業同席が難しい児童、特別支援学級在籍児童も対象とする
- ・担当者のICTスキルに応じた機器やアプリの選択
- ・動画を用いた家庭学習支援が有効な指導場面

(2) オンライン会議システムとSTを活用した授業支援（以下、実践2とする）

昨年度、オンライン会議システムを用いて「ことばの教室」での指導経験が少ない新潟県中越地域の担当者に対して、STがオンラインで授業同席する支援を行った。実践前後に行った担当者への質問紙検査の結果を比較したところ、構音指導に関する複数の項目で不安が軽減されたことが分かった。新潟県では「ことばの教室」は中越地域だけでなく、上越や下越地域にも設置されている。構音指導の進め方やGIGA端末等が異なる他地域の担当者からも同様の成果が得られるのか、支援の対象を拡大して検証する。さらに、限られた予算で運用していくため、STが授業同席する時間や頻度に軽重をつけて実践し、その効果を探る。以上のことから実践2は、以下の視点で取り組むこととした。

- ・支援対象の拡大：新潟県上越地域の担当者も対象とする
- ・担当者のICTスキルに応じた機器やアプリの選択
- ・担当者支援における適切なSTの介入頻度

3. 研究の経過

本研究は、金沢星稜大学の新谷洋介教授、北海道医療大学の辻村礼央奈助教からの指導助言を踏まえて実施した。

(1) 研究の対象 実践1、2の対象については、以下の表に示すとおりである。

表1 実践1の対象と動画の共有方法

対象	保護者の授業同席が難しい児童	教室に来る頻度が少ない児童	特別支援学級担任（児童）
人数	6人	4人	1人（児童4人）
共有方法	Classroom	Classroom / MS Teams	Classroom
GIGA 端末	Chromebook	Chromebook / Windows PC	Chromebook

※筆者を含む5名の「ことばの教室」担当者が実践する。

表2 実践2の対象と地域やGIGA 端末

対象	A 教諭	B 教諭	C 教諭	D 教諭
担当年数	0年	7年	3年	3年
OJT 形式の育成研修	あり（1年間）	なし	なし	なし
担当地域	中越地域	中越地域	上越地域	上越地域
GIGA 端末	Windows PC	iPad (Lighting 端子)	iPad (Lighting 端子)	iPad (Lighting 端子)

(2) 実践の環境

① 連絡調整や情報交換のオンライン環境：実践1・2共通

2024年度に引き続き Google のサービス (Chat、カレンダー) を使い、実践に参加する「ことばの教室」担当者同士や支援をいただく ST と連絡調整する場を作る。また、Google Document に事例の経過 (実践1) や授業の振り返り (実践2) を記載し、他の担当者と共有できる仕組みを作る。

② アプリや ICT 機器：実践1 (図1参照)

保護者との動画の共有は、Google Classroom や MS・Teams 等の教育用グループウェアを利用する。これらのグループウェアは、学級で使用されているため、担当者、保護者双方にとって使いやすいと思われる。また「ことばの教室」で動画を撮影する際は、昨年度の Panasonic 教育助成で整備した ICT 機器を使用する。デジタルビデオカメラの光学的なズーム機能のおかげで、担当者と児童のやりとりや児童の口腔周辺の様子等、課題に応じた映像が録画できる。授業同席できない保護者にとって、分かり易い映像になると思われる。なお、担当者の求めで保護者が家庭で動画を撮る場合は、GIGA 端末内蔵のカメラを使用する。

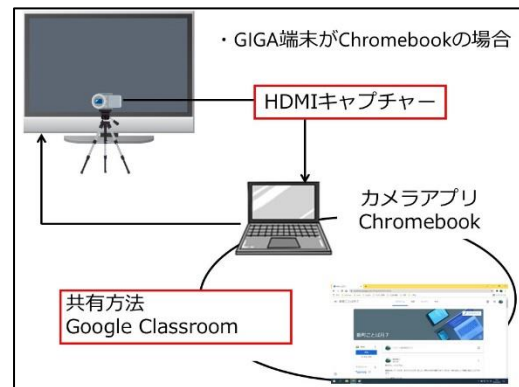


図1 実践1のICT環境

③ アプリや ICT 機器：実践2 (図2参照)

オンライン会議システムには Zoom を利用し、ST による授業同席を行う。今年度は GIGA 端末のみでの実践を開始し、実践が軌道に乗ってから ICT 機器を追加する。昨年度は、実践開始後すぐにデジタルビデオカメラや HDMI キャプチャー等の ICT 機器を導入し、課題に合わせた映像を ST と共有できる環境を整えた。しかし、担当者自身がこの環境に戸惑い、接続のトラブル等が生じた。このため、今年度は ICT 機器の導入を急がないこととする。

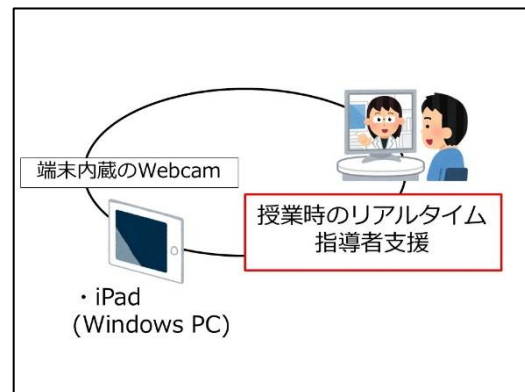


図2 実践2のICT環境

(3) 支援の進め方について

① 実践1

隔週でオンラインの事例検討会を実施し、事例の経過報告や保護者と共有した動画を紹介し合う場とする。事例検討会には、実践1に参加する担当者だけでなく、動画を用いた家庭学習支援に関心のある担当者も参加する。検討会では使用しているアプリや ICT 機器、動画で示された課題の妥当性、児童の構音の改善具合等を検討していく。

② 実践2

ST の授業同席は、構音指導の中心的な課題 (例：目的の音を誘導する場面等) を行う 20 分程度とする。授業終了後は当日又は翌日に、担当者と ST で 20 分程度の振り返りを行い、進捗

状況の確認と授業方針の相談、次の授業での注意点の共有や必要な技能実習を実施する。

授業支援の頻度は、開始から2か月間は毎週とし、その後は月1回程度の経過観察とする。その間も常に Google Chat にて担当者と ST が連絡できるようにし、必要な時に相談できるようにする。

(4) 実践の評価方法

① 実践1

構音指導に関する質問紙調査、及び動画を用いた家庭学習支援に関する質問紙調査を複数回実施し、成果や課題を分析する。

② 評価方法：実践2

構音指導に関する質問紙調査を、事前と学期終了時に実施し、成果や課題を分析する。

(5) 活動内容

表3 本研究の活動内容

月	活動内容	
	実践1に関すること	実践2に関すること
4	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・各教室で実践の対象となる児童を決め、保護者に了解を得る。 ・STを派遣していただく一般社団法人ことばサポートネット（以下「サポートネット」）の代表と担当で、打ち合わせを行う。 ・実践に参加する担当者に対して、構音指導について実践前のアンケートを取る。 </div>	
5		
6	～準備が整った担当者から授業実践を開始する。～ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> 第1回中越言難研修会にて、本研究の概要について報告する。（オンラインでの開催） </div>	
7	<ul style="list-style-type: none"> ・構音指導における保護者の位置付けについて、目黒文先生（学習療育支援ポラーノ）よりお話をいただく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践2の参加者に構音指導に関する1学期終了時のアンケートを取る。
8	北海道医療大学の辻村礼央奈先生に本研究の概要やこれまでの成果について伝え、指導・助言を受ける。	
9	～夏季休業後に、授業実践を再開する。～	
10	<ul style="list-style-type: none"> ・実践1と事例検討会の参加者に動画での保護者支援に関するアンケートを取る。 	
11	<ul style="list-style-type: none"> ※辻村先生からは、随時、実践1の事例検討会に参加していただき、指導・助言をいただく。 	
	第51回全日本教育工学研究協議会全国大会・茨城つくば大会に参加し、これまでの実践で得られた成果や課題について発表する。	
12	<ul style="list-style-type: none"> ・実践1の参加者に構音指導に関する2学期終了時のアンケートを取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践2の参加者に構音指導に関する2学期終了時のアンケートを取る。
1	～冬季休業後に、授業実践を再開する。～	
2	<ul style="list-style-type: none"> ・実践1と事例検討会の参加者に動画での保護者支援に関するアンケートを取る。 	
	第3回中越言難研修会で、これまでの実践で得られた成果や課題を、口頭で発表したり研修誌に掲載したりして会員に共有する。（オンラインでの開催） ※中越言難研修誌「あゆみ」第39号 発行	

4. 代表的な実践

実践 1：保護者の授業同席が難しい児童

(1) 児童Aの概要（一部抜粋）

・主な困りごと…「か行音」や「が行音」がはつきりしない。

(2) 指導の方針

① 構音指導に関するもの（一部を抜粋）

・入学前に発達相談室に通っており、「か」の単音は獲得できていたため、復習を兼ねて単音レベルから丁寧に練習を進めていく。

② 構音練習の進め方（図3参照）

・保護者への課題の出し方は、動画を基本としテキストで補足する。保護者の応答はテキストとする。（図3の黒線で示した流れ）

・学校行事等で授業ができない場合のみ、教室と家庭で動画のやり取りをしながら、指導を進める。（図3の赤線で示した流れ）

(3) 指導の経過

・「ことばの教室」設置校に在籍する児童のため、水泳学習等の期間や学校行事が無ければ、基本的には毎週1時間ずつ授業を行うことができ、児童の様子を確認しながら適切な課題に取り組むことができた。

・保護者はGoogle Classroom上で共有された動画を参考に、家庭で練習に取り組んだ。6月から2月までの指導で、「か行音」「が行音」が会話レベルで構音できるようになった。今後は「りや、りよ、りゆ」の指導に進む予定である。

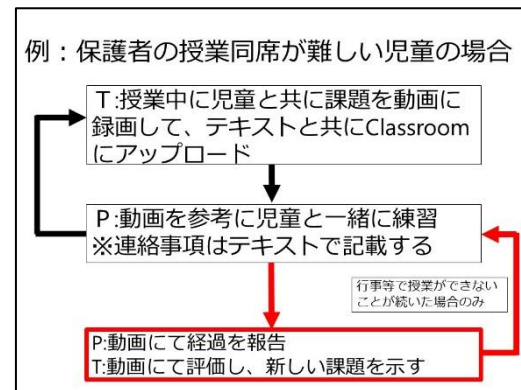


図3 保護者の同席が難しい児童の場合の課題の出し方

実践 1：特別支援学級在籍児童

(1) 児童Bの概要（一部抜粋）

・主な困りごと…「し」や「ち」をうまく言えない。

・舌の様子…舌を出した際には筋緊張が高まり、舌が棒状になる様子が見られる。

(2) 指導の方針

① 構音指導に関するもの（一部を抜粋）

・舌を歯間化させて単音節「す」を誘導後、「す」→「すい」→「し」の順で目的音「し」を誘導する。

② 構音練習の進め方（図4参照）

・新しい音に進む場合や動画で次の課題に進むことが難しい場合は、「ことばの教室」担当者がオンライン又は対面で授業を行う。その中で、特別支援学級担任や保護者へ課題を示す。（図4の赤線で示した流れ）

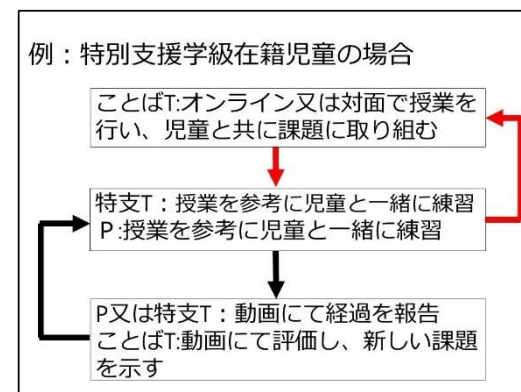


図4 特別支援学級在籍児童の場合の課題の出し方

- ・特別支援学級担任は朝の会や国語の時間の冒頭等で、保護者は家庭で、課題に取り組む。
- ・2週間に1回程度、保護者から動画にて経過を報告してもらう。「ことばの教室」担当者は動画にて、児童の構音を評価したり、次の課題を示したりする。(図4の黒線で示した流れ) 児童の練習が順調に進んでいる場合は、動画のやり取りを繰り返していく。

(3) 指導の経過(「す」から「すい」を誘導するまでの期間)

- ・教育相談や構音検査、特別支援学級担任に練習内容を提案する初回の授業は、対面にて実施した。
- ・舌癖が強くなかったため、早い段階で舌を脱力させて平らな状態を作ることができた。
- ・歯間化した「す」の子音の誘導、「すー」や「すいー」を作るところは、対面やオンラインの授業を実施した。
- ・動画の中で保護者がうまくモデル提示をすることができないことがあったため、対面やオンライン授業では、特別支援学級担任だけでなく保護者にもモデル提示の練習をしてもらった。
- ・通常の授業に比べて時間は掛かっているが、8月末から2月までの指導で「し」の前段階である「すい」まで進むことができた。

実践2：オンライン会議システムとSTを活用した授業支援(上越地域：C教諭)

(1) 児童Cの概要(一部抜粋)

- ・主な困りごと…入学前にこども発達支援センターで構音練習をしていたが、改善に至っていない。
- ・昨年度までの様子…側音化構音があり、イ列音を中心に歪みがある。特に「チ」「キ」が歪む。しかし、歪みに対して本人があまり意識しておらず、構音改善に向けた動機付けは高くない。

(2) 指導の方針

【STとの連携開始前】4～5月：4回

- ① 相手に自分の思いや要件を伝えようとする気持ちを育む。
- ② 舌をコントロールして動かしたり脱力したりするトレーニングをする。
- ③ 指先の巧緻性を高める活動を取り入れる。

【STとの連携開始後】6月～

- ① 相手に自分の思いや要件を伝えようとする気持ちを育む。
- ② 舌を脱力して左右対象な状態でイ列音を出せるようにする。指導順は、
・「し」→「い」→「ち」→「じ」→「ぎ」→「き」→「に」→「ひ」→「り」→「げ」→「け」
・それぞれの拗音は、「け」まで指導が進んだら行うことにする。
- ③ 単音節の導入をしたら、無意味音節、単語と進めて、次の目標音に入る。
- ④ モデルの速度や音の区切り、曖昧母音の音などを児の様子に合わせてねらいに近付ける形で提示する。
- ⑤ その段階ごとの基準を設けて肯定的な評価を返しながら、目標音の練習を積み重ねる。

※STとの連携後に、具体的な構音指導が開始される。(四角で囲んだところが構音指導に関すること)

(3) 授業同席の実際

ST がどのように授業に同席して連携しているのかを略案形式で示す。

① 本時のねらい

・「お口ポケ、舌見せて」での「し、い、ち、じ」の単語の積み重ね練習をし、よりスムーズに単語の中で目標音を出せるようにする。

・「お口ポケ『ぐ』→お口ポケ『い』」の音を、担当者のモデルを真似て出す。



写真1 STによる授業同席の様子

② ねらいにせまるための手立て

- ・担当者のモデルを復唱させながら、「し、い、ち、じ」の入った単語の練習回数を重ねる。
- ・担当者がモデルを示す際は、児童の様子を評価しながら発話速度を遅くしたり一音ずつ区切ったりする調整を行い、正しく構音できるように配慮する。

③ 展開（構音練習に関わる部分でSTによる介入があった場面を一部抜粋）

学習活動	担当者の働きかけ	○目標 ※留意点 ◇評価の基準	STとの連携（★）
「し」の単語（復唱） 「い、ち、じ」の単語（復唱）	T：真似をしましょう。 ・「し」の単語のモデルを音声で示す。（★） ※「い、ち、じ」の単語について、同様に練習させる。	○脱力した舌を両方の口角につけた状態で、「し」の単語を復唱することができる。 ※ 児の状態を見て 、モデルの提示速度を遅くしたり単語を一文字ずつ区切ったりしながら、 エラーレスで進める。 （★） ◇「し、い、ち、じ」の単語を脱力した舌を両方の口角につけた状態で構音できたか。	★児は舌の脱力ができずに舌が薄くなり非対称の偏位が頻回に見られたため、それぞれの音の練習後に、担当者からSTへ評価と修正を依頼した。 STは「ち」を練習する際、口角に力が入らないように誘導した。
「ぎ」の導入	T：真似をしましょう。 ①「お口ポケ」の確認 ②「ぐ」 普通の言い方 ③お口ポケで「ぐ」 ④お口ポケで声（曖昧母音） ⑤ ③→④を連続で行う。（★）	○提示されたモデルを復唱し「ぎ」につながる音が出せる。 ※教師のモデルを復唱させながら、 スモールステップで練習を進める。 （★） ◇「ぎ」につながる音が構音できたか。	★適切に誘導できないまま担当者との練習が終わったため、STに助言を求めた。 STは「ぐ」と「い」で口を動かさないことをモデルにて示した。 児に模倣を促すと、口の開き方を変えないことを意識してSTのモデル通りに真似ることができた。（写真1参照）

5. 研究の成果

(1) 教育用グループウェアと動画を用いた家庭学習支援

① 対象の拡大可能性

他校通級・保護者未同席への対応：実践開始時は、担当者5名で14名の児童（特別支援学級児童を含む）に対して支援を行った。それが2学期終了時は、33名と大幅に支援対象の児童が増えた（表4参照）。また、事例検討会のみ参加していた担当者の中にも、動画を用いた家庭学習支援に取り組む者が現れた。GIGAスクール構想が実現した現在なら、比較的取り組みやすい支援であると同時に、担当者にとって有効な手立てであると感じたからだと考える。

表4 2学期終了時の実践1の対象と動画の共有方法

対象	保護者の授業同席が難しい児童	教室に来る頻度が少ない児童	支援学級在籍児童(担任)	合計
実践開始時	6人	4人	4人(担任1人)	14人
2学期終了時	22人	5人	6人(担任3人)	33人
共有方法	Classroom/Chromebook本体	Classroom/MS Teams	Classroom	

専門性向上のための事例検討会：定期的な事例検討会の実施で、担当者間で宿題動画を提示しながら経過を報告したことで、自分の指導(モデル音の提示速度や課題設定)を客観的に見直し、他の担当者から助言を得る機会となった。これは担当者のスキルアップや、経験の浅い担当者への支援としても有効であった。そもそも担当者の評価が不確かでは、適切な課題を出すことができないからである。GIGA スクール構想の環境と共に、担当者のスキルも向上することで実現できる支援と言える。

保護者との協力体制の構築と支援：この支援を実現していくには保護者の協力が不可欠である。そのため、初回の教育相談時から構音指導では保護者の協力が欠かせないことを伝えたり、保護者のスキルに応じて GIGA 端末の扱い方を教えたりすることも必要になる。

② 担当者の ICT スキルに応じた機器の活用方法

汎用ツールの活用：Google Classroom や Microsoft Teams など、学校現場で既に導入されているグループウェアを活用することで、新たなツール導入のハードルを下げ、保護者ともスムーズに連携を開始できた。

柔軟な共有方法の選択：当初は、保護者とのやり取りができないため望ましくないと考えていた GIGA 端末本体に動画を保存して家庭に持ち帰る方法も、連絡ファイル等で伝えるよりも課題が正しく伝わるため、保護者の状況に合わせて取り入れる柔軟さが大切だと感じた。

③ 動画を用いた家庭学習支援が有効な指導場面

長期休業中の「指導空白」の解消：夏休みなどの長期休業中に動画のやり取りを行うことで、練習のモチベーションを維持し、休み明けの構音の崩れを防ぐことができた。

誤学習の防止と修正：家庭での練習動画を確認することで、保護者が判断に迷う微妙な構音操作や、実態より難しい課題に取り組んでいる状況を把握し、担当者が手本動画を送ることで軌道修正ができた。さらに、長期休業中でも誤った練習方法(速すぎる発話など)に早期に気付き、修正することが可能となった。

視覚的フィードバックによる意識付け：自分の口元の動きを映像で客観的に見ることで、鏡を見るよりも構音操作への意識が高まり、正しい音への修正につながる場面が見られた。

(2) オンライン会議システムと ST を活用した授業支援 (実践2)

① 対象の拡大可能性

地理的制約解消の可能性：上越地域の「ことばの教室」担当者に対しても、オンライン会議システムと ST を活用した授業支援を実現できた。事例の数は少ないが、県外在住の ST とオンラインで連携し、対面の機会が一度もなくとも信頼関係を構築し効果的な指導が可能であることが示された。このことから、ICT 環境が整っている「ことばの教室」であれば、新潟県内の他地

域でも同様の実践を実現できる可能性が示唆されたと言える。

経験の浅い担当者への授業支援：4. 代表的な実践（実践2）で述べたように、指導経験が少ない担当者であっても側音化構音などの難易度の高い症例に対し ST の助言を得ながら指導できた。これは、担当者の経験則や自己流になりがちな指導に対し、客観的なフィードバック（口角の脱力、モデル提示の修正等）が入ることで正しい指導法への軌道修正ができたからだと考える。「ことばの教室」での子どもたちへの指導は公教育の一環で行われている。指導の質を維持するためにも、OJT 方式の研修を未受講のまま教室を担当せざるを得ない教員に対しては、何らかの授業支援が必要ではないだろうか。

② 担当者の ICT スキルに応じた機器の活用方法

ICT に不慣れでも実施可能な環境：学校情報化診断システムの教科指導における ICT 活用を、構音指導における ICT 活用として読み替え、実践前に評価を行った。実践2の参加者は1に満たないような項目がほとんどだったため、軌道に乗るまでは GIGA 端末本体のみを用いて実践を行った。このため、大きなトラブルも無く、ST との円滑な連携が可能になった。新潟県の中越や上越地域に点在している「ことばの教室」の担当者を対象としているため、連携には ICT の利用が欠かせない。しかし、実践に不可欠な ICT スキル等を学ぶ場は限られているため、実践しながら少しずつ学んでいけるような配慮が求められた。

観察に適した視聴環境の確保：舌の微妙な動きや歪み音を正確に捉えるためには、画面上の表示サイズや画質、カメラアングル（ST 側に見える映像）に配慮が必要になるが、これらを解決する手段として、昨年度の実践では ICT 機器を追加した。今回は Lightning 端子の iPad を使用している担当者が多く、外付けカメラの接続に大変苦労した。最終的には専用の機器（SeeMo）と専用のアプリ（Accsoon See）を導入することで iPad 上でも児童の舌を大きく映す環境を実現した。今後、GIGA 端末が更新されて USB-C が接続できる機器が増えれば、今回のような苦労が無くなるだろうと期待している。

③ 適切な ST の授業同席の頻度

担当者の状況に応じた授業同席の頻度：支援を開始した直後（最初の2カ月）は、新しい音やこれまでうまく指導できなかった音への指導が中心だった。そのため、ST が「毎週」授業同席して支援することは、担当者のスキル向上と児童の変容に有効だったと考える。構音指導に関する質問紙調査（1：不安である～4：不安はない）でも、関連するカテゴリーの不安が減少していることが分かる（表5 赤枠参照）。その後、担当者が指導のコツを掴んだり、単語練習などの定着期に入ったりした段階で隔週又は月1回を授業同席の頻度とした。この間も Google Chat での ST とのコミュニケーションは継続しており、新しい音を誘導する際や判断に迷う時には単発の打ち合わせや授業同席

表5 構音指導に関する質問紙調査（実践2）

カテゴリー	開始前	2か月後	6か月後
【評価～授業計画の立案】	1.58	1.70	2.05
【構音指導の準備段階】	1.92	2.54	2.63
【音作りの実際】	1.36	2.14	2.40
【無意味音節～汎化】	1.40	2.25	2.45
【構音指導全体を通して必要な技能】	1.33	1.63	1.90

が可能であった。このような支援が継続されていたため

か、授業同席の頻度を減らしても、緩やかではあるが不安は減少傾向にあった。実践からは、STの授業同席が構音指導のどのカテゴリーに有効なのかや、適切な授業同席の頻度等の手掛かりを得ることができ、大変有意義だった。

事前・事後時間の確保：授業時間（指導への介入）だけでなく、指導前の打ち合わせ（ねらいの共有）や指導後の振り返り（フィードバック）の時間をセットで確保することが、この実践の効果を高めるために不可欠である。

6. 今後の課題・展望

2024・25年度はPanasonic教育財団の助成を受け、中越言難の有志と共にクラウド活用による家庭学習支援（実践1）や外部専門家（ST）によるオンラインでの遠隔授業支援（実践2）に取り組んできた。その成果は課題を含めて5で述べたとおりだが、実践2に参加した担当者から話を聞くと、授業後の振り返りで、STと対話しながら「介入の意図」を学んだり「モデル提示」の実習を受けたりする等の時間が担当者の専門性を高めたことが分かった。しかし、新潟県中越地域の「ことばの教室」の多くは自校に1人しか担当者がおらず、このような専門的な対話の場は極めて限定的である。また、STからの支援は効果的だが、助成終了後の持続可能性には課題がある。そこで2026年度は、担当者に対する「個」への支援を「集団」の学びに広げるために、STを交えたオンライン事例検討会を開催し担当者同士が共に高め合う場の創出を検討している。さらに、近年急速に発展している生成AIを構音指導に活用する有効な方法を、事例検討会の場でSTや担当者と共に検討していきたい。

7. おわりに

GIGAスクール構想が実現して、学校のICT環境は飛躍的に向上した。この環境を生かすことで以前はできなかった支援を複数の地域で実現し、それぞれの参加者が対象とした事例の構音改善に貢献することができた。新潟県では、2026年10月に第65回全日本特別支援教育連盟全国大会新潟大会が開催される。筆者は中越言難の会員と共に、これまで取り組んできたICTを活用した支援を紹介することになっている。この大会が県内外の「ことばの教室」担当者にとって、GIGAスクール構想の環境を生かした指導を考えるきっかけになればと願っている。

最後に、本研究の遂行に関わって助成をいただいたパナソニック教育財団、共に実践に取り組んだ上越地域や中越言難の先生方、ご助言をいただいた新谷洋介先生（金沢星稷大学）、辻村礼央奈先生（北海道医療大学）、ご支援をいただいたオンラインサポートチームの皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

8. 参考文献

守口 Resource room 研究会（2022）ICTを活用した教員ネットワークの形成と双方向型情報共有による子どもアシストシステムの構築

辻村礼央奈ほか（2023）ビデオ通話サービスをもちいた機能性構音障害児へのオンライン構音訓練の開発